

日本の環境倫理における自然・政策・思想の影響

——森林の維持と江戸時代のエコシステム

山本修一

1 はじめに

日本は1960・1970年代にかけて公害先進国という不名誉なレッテルを貼られたことがある。それは、水俣病、イタイイタイ病などの象徴的な公害問題が起こり、世界的にもよく知られることになったからである。しかし、1970年代後半になって様々な法的整備がなされたおかげで、公害問題の裁判上での問題は未だ残っているものの、その多くは解決した。¹

970年代初頭には、毎日のように光化学スモッグ注意報が発令され、また東京湾に注ぐ河川には魚は1匹もないといわれたほど汚染されていたが、現在光化学スモッグの注意報が発令されることはほとんどなくなり、さらに河川には魚が戻り、鮭の遡上さえ期待されるほどになっている。

しかし、公害先進国といわれたその一方で、日本には誇れるものがある。その象徴的なものが現在でも保持されている森林の豊かさ、17世紀から19世紀の江

戸時代（1603・1868）の当時としては理想的なエコシステムである。これらは日本の歴史の中で築き上げられてきた世界に誇れる事例であると考ええる。

本研究では、この2つの事例をとりあげ、3つの観点、すなわち気候や地理などの自然条件、政策および思想・宗教の影響について考察する。

2 豊かな森林保持

FAO（国連食糧農業機関）の2005年の報告によれば、日本の森林率は国土の68・2%であり、これはフィンランドの79・3%について世界2番目である。国土が小さいうえでの割合の値であるから、世界から見た場合、大きな割合を占めるわけではなく、このことはあまり知られていない。

しかし日本も現在にいたるまでに森林破壊があったことは世界の例外ではなく、近代以前においては、2度の大きな森林破壊の時期があったことが知られている。⁽¹⁾ そのひとつは、7・8世紀の国家形成期である。

この頃、中国の随、唐にならない、都には巨大な寺院が

建立され、そのため森林資源の大きな需要があったからである。ただし、このときは都のあった地域（近畿一円）に限定されていた。そして、もうひとつの時期は、安土桃山時代（1573・1603）から江戸時代前期（1700年頃まで）にかけてである。このとき森林開発は一挙に進んだことが知られている。人口増加、都市化などに伴う、住居、寺院、橋、船などの建造物への利用、樽、桶、箆笥などの家具や燃料などの利用により、木材需要が急激に増加したからである。そのため、この時代は現在よりも森林率は低かったようである。

2・1 日本の気候・地理

日本の国土は北緯20度から45度にかけて南北に3500 km以上と長く、本州など主要な国土の気候帯は中緯度に属するため温帯域にあるが、国土全体は南北に長いことから南は亜熱帯気候であり、北は亜寒帯気候に属する。火山帯が全土を貫き、背骨のように3000 m級の山脈が続く。そのため平野部は少なく、地形

は複雑であり、地震活動も極めて活発である。また、周囲は海によって囲まれており、海洋性気候であり、アジアモンスーン地域に属し、明確な四季がある。そして夏は高温多湿なため降水量は年平均1700ミリと比較的多く、屋久島などは年3000ミリを超える。中緯度地域に属する他の国々と比べて2倍以上の降水量がある。多雨で水に恵まれていることから多種多様な森林が育つだけでなく、20・30年も放置しておけば森林が再生する条件を備えていることは確かである。しかしながら、同じ中緯度地域であり、アジアモンスーン地帯に属する中国の森林保有率が21・2%であることと比べると、いかに日本の森林保有率が高いかが理解できる。また、同程度の国土面積を有するドイツ(3550万ha)と比べると、森林保有率は31・8%と、日本の半分以下である。また、日本は森林が豊かなだけでなく、生物多様性にも富んでいる。日本人が自然を大切にしてきたことはこのような自然要因も大きな影響があるだろう。

一方、日本は平地が少なく、その少ない平地は弥生

時代にはじまる稲作によって水田化された。水田は水を必要とするため、平地に限られるからである。また、山は急峻なため、水田には不向きで、その上、樹木を伐採しても牧草地になりにくい。そのため日本の農業は稲作が主体で、森林を荒廃させる牧畜が導入されなかったことも森林が国土の2/3も保たれてきた要因の一つと推測されている。⁽²⁾これも日本の地形に係があると考えられる。

2・2 江戸幕府の政策

コンラッド・タットマン(1998)⁽³⁾や鬼頭宏(2002)⁽⁴⁾は、日本の森林保持に果たした江戸幕府による政策の役割に注目している。例えば、森林伐採を規制し、積極的に木を植えて育てる政策として、「諸国山川掟」を諸国の代官に発令し、土砂流出と洪水を防ぐために、草木を根こそぎとることを禁じ、また川上で木のない山には苗木を植えることを奨励している。これは日本の農業が河口のデルタ地帯に発達した平地の水田による稲作が中心で、そのため植林や治水工事を施

さなければ氾濫しやすかったためである。また、森林保護のために樹木の伐採を禁じる「留木」、山林への立ち入りを禁じる「留山」、などを設けて厳しい規制を敷いたことや、地域の分割や期間を限定して利用を制限する「割山」「年季山」なども試みられている。また、江戸時代、地方の岡山藩主池田光政に重用され一時藩政を主導した陽明学者の熊沢蕃山も、植林による森林の復活は、治山治水の上からも重視しているし、幕府も布令によって植林を奨励した。このようなことから、タットマン(1998)⁽⁵⁾は採取林業から育成林業への転機が17・18世紀にかけて起こり、世界に先駆けて収奪的な林業から持続的な育成林業への転換に成功したことを指摘している。

2・3 思想・宗教の影響

では、思想・宗教はどうだったのであろうか。自然環境が自然観などの思想や宗教に影響を与えることもあれば、思想・宗教が政策に影響を与えることも当然考えられる。

梅原猛(1995)⁽⁶⁾は、縄文時代以来の信仰から考えると、日本人が基本的にもってきた2つの世界観が考えられるという。ひとつは、人間、動物、植物など生きとし生けるものはすべて平等であり、同じ生命をもつことである。すなわち人間だけが特別の存在ではないという考え方である。このような考え方は、日本の民族のひとつであるアイヌの文化や、木を崇拜する日本土着の信仰である神道に見られる。アイヌの文化ではあらゆる万物をカムイ(神)と見なし、たとえば熊は、単なる獲物ではなく、毛皮や肉を人間にもたらししてくれる神の化身であり、樹木も木の実や材木をもたらししてくれる神の化身である。彼らの考えでは、死んだ世界(あの世)は、人間だけでなく、死んだ熊や木もこの世と同様に生活を営むところである。ゆえに人間だけでなく、熊や木も手厚く葬る必要がある。そうすることによって再び、熊は人間の世界に戻ってくるといふ。梅原は、アイヌの文化は縄文時代からの信仰が残ったものであると考えている。日本の土着信仰である神道では、樹木だけでなく、動物、山や川、岩

などの非生物にも神が宿っているという考えがある。こうしてすべての生物は人間と同じ生命をもつとの考えが、仏教の「悉有仏性」と結びつき、やがて「山川草木国土悉皆成仏」という日本特有の仏教思想の素地となったのだという。梅原はもうひとつ、生死を繰り返す生命の循環思想をあげる。アイヌの文化の熊に見られたように、自然の中で生と死はめぐることである。人間も、また死んだ後、魂として存在し、その魂は盆や彼岸ごとに帰ってくる。これは現在にまで引き継がれている宗教行事に表れている。この2つの考え方を基本にすると、日本に仏教が入ってきた後、その仏教がどのように変容したかをよく理解できるといふ。

このような仏教や神道の思想は、日本人が森林を保ってきたことに大きな影響があったと考えることができるだろう。そこでもう少しその内容を検討したい。

①「山川草木国土悉皆成仏」

「山川草木国土悉皆成仏」は、人間だけでなく動物、

そして山や川や草や木も、すべて人間と同じように命をもち、成仏できるという仏教思想である。この思想は、インドの仏教に由来するものではない。インド仏教では植物は衆生に入っていないからである。ただし、インド仏教が植物を軽視しているわけでは決してなく、釈迦が悟りを開いたのは菩提樹下であり、また蓮華の花は仏典にも登場し、法華経が「蓮華に喩えられる正しい教えの教典」といわれるように、菩提樹や蓮華といった植物はむしろ仏教のシンボルでもあるから⁷⁾だ。

この「山川草木国土悉皆成仏」の植物や山川などに仏性があるといった考え方は、もともと中国の三論宗の吉蔵(549・623)の『大乘玄論』の可能性が高く、そして日本に影響を及ぼしたのは天台宗の六祖・湛然(711・782)の『金鉤論』である。そして、日本に仏教が入ってきてからは、伝承ではこのような本覚思想は平安時代の天台宗の僧、源信(942・1017)に由来するといわれている⁸⁾。しかしこの思想は、中国ではあまり定着しないで、自然の豊かな日本

でこそ開花した、日本特有の思想になっている。そのためこの思想は仏教の枠を超えて、中世の文学・美術・芸能にまで広く影響をおよぼしてきたものと考えられる。⁽⁹⁾

現在の日本では、春には桜の開花前線が、秋には紅葉の始まりが、また秋には虫の声がその時期になるとテレビで報道される。このように自然の移り変わりは今でも日本人にとってその情操を培う上で大きな影響をもっており、「山川草木国土悉皆成仏」の思想が現在にまで影響を与えている事例であろう。四季折々に美しい様相を見せる日本の豊かな自然環境が、あらゆるものに神が宿っているという土着の信仰である神道や自然観を生み、それがやがて草や木も、また鳥の鳴き声や虫の音、山や川の景観も、すべて仏になるという「山川草木国土悉皆成仏」思想へと発展してきたことはよく理解できる。このような思想が日本人の思想の基底をなし、森林保持の上で大きな影響をもってきたことは十分に考えられるだろう。

②生命の循環思想

季節が自然の様相を明確に変化させる日本では、落葉広葉樹も多く、そのため冬になるとすべての葉が落ち、いったん枯れたようにさえ見える。この木々や野原が、春になると一齐に芽吹き、新緑の季節を迎える頃の美しさはすばらしいものがある。また春になると冬眠から目覚めた動物や昆虫がどこからともなく現れてくる。こうした現象が、生命は循環するという思想を生んだことはよく理解できる。ゆえに、あらゆるものに精霊が宿り、そしてその精霊が循環するという考え方が、古来より日本人にとって必然的な思想であり、またそれが日本の土着宗教の特徴になっていることもよく理解できる。こうしたことから、秋には紅葉する広葉樹の森を保持し、木曾や熊野の針葉樹の森の美しさが失われることを憂え、植林によって再生を願うことは日本人にとって必然的なものであったことも十分納得がいく。

仏教における循環の思想、すなわち輪廻の思想は、日本の古代神道とほとんど共通のものである。仏教経

典の一つ『梵網經』の第二十輕戒「不行放求戒」⁽¹⁰⁾には、「六道の衆生は皆これ我が父母なり。……一切の地・水は、これ我が先身、一切の火・風は、これ我が本体なり、故に放生を行じ、生生に生を受くること、常住の法なれば、人に教えて放生せしめよ。」とある。これは、輪廻には六道の衆生のみならず、地水火風の非生物まで含み、これらすべてが輪廻することを述べている。ゆえに、放生を行じることの重要性を戒としておいているわけである。したがって、仏教には古代神道における動物や樹木などの精霊の循環に加えて、非生物もまた循環するという思想があることを意味している。

日本で生まれた神道とインドで生まれた仏教に共通のものはないか。それは森林である。鈴木秀夫は『森林の思考・砂漠の思考』⁽¹¹⁾の中で、「世界にはじめと終りがあるか、それとも永遠に続くと考えるかという二つの世界観を成立させた場所が、それぞれ砂漠と森林であった」と述べ、この砂漠の思考はキリスト教のような天地創造からはじまり、終末に至る「直線的世界

観」であり、また森林の思考は仏教のような万物が流転・循環する「円環的世界観」であることを述べている。したがって、古来の信仰である神道にも、また仏教にも、共通の思想としてある循環の思想は日本人の思想の底流をなし、生命が循環する森を減ほすことは自分たちの生命を減ほすことと同じであることから、日本では豊かな森林が保たれてきたものと考えることができらるだろう。

日本で植林をし、森林が保たれてきたことは、仏教の実践の上からも正しい行いであることを示している。仏教を重んじ、善政を行ったことで知られている古代インドのアショーカ王（在位BC273・232）は「アショーカは、」すべての国民は一生の内に最低でも五本の木を植えるべきであり、そしてその面倒をみるようにと布告した。彼は国民に、一本の薬効のある木、一本の果実のなる木、一本の薪となる木、家を建てるために一本の堅い木、そして一本の花を咲かせる木を植えることを求めた。彼はそれを、『五本の木の森（パンチャヴァティ）』と呼んだ⁽¹²⁾ことが知られて

いる。ゆえに、日本で植林をし、森林を保ってきたことは、仏教の実践の上からも正しい行いであることを示している。

3 江戸のエコシステム

江戸時代に実施されていた江戸およびその近郊でのエコシステムについては、日本の環境省が発行する『環境循環型社会白書』⁽¹³⁾、『江戸に学ぶエコ生活術』⁽¹⁴⁾、『環境先進国江戸』⁽¹⁵⁾など、多くの書籍にまとめられている。ここでは、そのうち代表的なものの概要を述べる。

3・1 江戸全体における循環システム

江戸は、江戸湾（現在の東京湾）を取り囲むように漁村、市街地、農村地帯、里山、森林地帯、そしてそれらを貫くいくつかの比較的大きな河川で構成されていた。江戸は人口100万以上で、当時から世界有数の大都市であった。そこで利用された食糧資源や発生する膨大な廃棄物をうまく循環させるシステムとし

て、大きなものが2つあったと考えられる。ひとつは、里山、農村、市街地を結ぶ循環システムである。市街地を取り囲むように存在した農村にとって、田畑で使用する肥料の確保は、極めて重要な要素である。肥料のひとつは農村にとって身近にあった里山から採取する落ち葉からつくる堆肥であるが、それだけで十分な肥料が確保できるわけではない。その不足分を補ったのが、市街地から大量に出るし尿や、薪を燃料として利用して出る灰であった。不足分というよりもむしろ、し尿や灰が質的にも優れた主要な肥料であった。それが江戸市街地の周辺に存在した農村へと運ばれ、肥料として有効活用され、そこで生産された野菜や米が再び江戸の市街地に戻されるという循環が成立していたわけである。

これに加えてもうひとつ、森林地帯、漁村、河川、江戸湾を結ぶ循環システムがあった。江戸市街地を含む関東平野周辺には豊かな森林地帯があり、その森林地帯や施肥された田畑から流出する栄養塩類は、江戸湾に注ぐ何本かの河川によって運ばれ、動植物プラン

クトン、魚、海草、貝類を育てた。漁村では江戸湾の豊かな海産物を取り、それは江戸の街で消費された。漁村では売れない魚などの内臓やアラは、溜めて農村の肥料として江戸周辺に運ばれた。こうして、もうひとつの循環システムが成立していたわけである。

この2つの循環システムは、当時のままといいわけではないが、現代的にも学ぶところの多い、理想的な資源循環システムであったことを示している。この2つの資源循環システムには、田畑の土作りや野菜の栽培において、街から出るし尿や灰、漁村から出る魚介類の廃棄物などが有効に活用されただけでなく、し尿や灰は野菜や米と交換され、また金銭的な取引もされていた。その上、後述するように衛生的にもほとんど問題のない循環システムでもあった。このようなことから、し尿や灰は都市住民にとって財源のひとつにもなり、経済的にも環境的にも理想的な循環システム（循環型社会）であったわけである。⁽¹⁶⁾

江戸時代の環境維持のための循環システムは、それぞれ専門職化されており、現代における循環型社会の

原型として注目されるほどのものである。これらは現代の循環型社会の理想とされる5R（修理：repair、再利用：reuse、リサイクル：recycle、貸借：rental、節約：reduce）に相当することが指摘されている。⁽¹⁷⁾

Repair（修理）..修理することによって長く使用することである。壊れたものを修繕して使うのは普通で、瀬戸物や茶碗を接着してなおす焼継屋、提灯や傘の張り替え屋、鍵の修理・鍋や釜の修理をする鋳かけ屋、刃物を研ぐ研ぎ屋、鋸の目立・樽や桶の修理をする箍屋と、それぞれ専門の修理屋がいた。

Reuse（再利用）..そのままの形で再利用することである。古樽、古着、履き物、日用雑貨などが再利用され、江戸では再利用を専門とする1182軒もの組合員がいたことも知られている。

Recycle（リサイクル）..新たな製品を生み出す再資源化のことである。その典型は、最も主要な農産物の稲である。実として得られる粃米は、一部は翌年種として利用され、農村部では粃殻をとっただけの玄米が食料として利用され、精米した米は年貢や都市部で販

売された。粕殻は、堆肥として利用された。一方、稲の茎や葉の利用価値も高く、履物、帽子、前掛け、むしろ、袋、藁葺き屋根などに利用され、使い古したものは堆肥や灰として肥料化された。そのため、廃棄物はほとんどなかったことが推定される。また、先にも見たように、し尿を農家に販売する肥汲みや、かまどで燃やしてできた灰を買い集める「灰買い」はその代表的な商人である。また、使えないほど古くなった包丁や鍋などの鉄製品、銅や真鍮などの金属類を買ってリサイクルの原材料とするため金属の回収を専門とする古鉄買いという商人がいた。

Rental（貸借）…買うことを控え、借りることである。貸本屋は、文化五年（1808年）の記録によると、江戸では約650、大坂でも約300もあったようである。⁽¹⁸⁾

Reduce（節約）…環境負荷を減らすために、資源の利用を減らし、効率を高め、廃棄物を減らすことである。上記のように、江戸では修理…repair、再利用…reuse、リサイクル…recycle、貸借…rentalがおこな

われ、最終的な廃棄物は極めて少なく、資源節約型であった。

こうして、江戸時代の社会は、資源節約型の消費社会であったと考えられる。そして、江戸の循環システムは、いくつかのサブシステムで支えられていた。次に、そのうち肥料生産、自給自足システムの具体例について述べる。

3・1・1 衛生的に管理されていた肥料生産

近世ヨーロッパの都市ではし尿の処理に有効な手段がとれず、河川への直接的な投棄などにより河川水の汚染が進み、ベストやコレラといった伝染病が猛威をふるったことが知られている。⁽¹⁹⁾しかし日本では病原体の媒介となったし尿等が適切な処理を施された後、肥料として使用されたため、伝染病の発生は少なかった。そのためのいわば装置が「肥だめ」である。⁽²⁰⁾「肥だめ」は、現代風にいえば嫌氣的コンポスト化の装置で、し尿を微生物の働きによって熟成し、肥料に変える装置で、畑の脇に穴を掘り、稲わらなどを加えて、

蓋を付けた簡単なものであった。しかし、この装置では様々な有機物の混合物であるし尿が肥料化されるだけでなく、微生物分解によって発生した熱によって、各種の病原菌や寄生虫、またその卵などはほぼ死滅する。こうして、病原菌等による感染症が社会に蔓延しないよう衛生的に管理されていたわけである。また、都市部ではし尿を効率的に利用しやすくするために、便所には大きな便槽が設けられ、嫌気的な分解を進めるとともに、くみ出しやすいように工夫が施されていた。⁽²¹⁾ こうして、都市と農村の間を往来する循環システムができていたわけである。

3・1・2 農村地域における自給自足

もうひとつの大きな特徴は、農民は基本的に自給自足の生活をおくっていたことである。⁽²²⁾ 食糧は自分たちで生産する野菜や米の農産物ではば自給自足され、そのほか調味料の味噌や醤油は大豆を発酵させてつくる自家製のもの、また森で採取する野草などの食糧、たいていの家の庭にある木から採取する木の実、川で魚

を捕ることによって自給自足のシステムがつけられていた。また、煮炊きや暖をとるエネルギー源は近郊にある里山から得られる木の葉や枝などであり、水は井戸を掘り近隣で利用した。自給できない綿、布地、金属や磁器製の家庭用品は村全体から得られ、さらには塩のような地域性のものは他の地域から取得されていた。ゆえに、基本的には各家において自給自足されたが、そこで充足されないものだけが村や周辺で補われるといったシステムがつけられていたわけである。

3・2 江戸時代の自然条件

江戸時代の気候は、小氷期と呼ばれるほどの世界的な寒冷化の時期であり、現在よりも気温は1・2℃低かった。その上、火山の噴火や大地震が相次いで起こっている。宝永4年(1707)には富士山の大噴火が起き、つづいて三原山(安永4年、1775)、桜島(安永8年、1779)の大噴火、さらには浅間山の大噴火(天明3年、1783)が起きている。火山の大噴火は、火山灰による直接の災害だけでなく、火山灰が成層圏

に上がることから、日射が遮られ、気温の低下だけでなく、気候不順も引き起こしたものと考えられている。こうした気温低下や気候不順は、農産物の収穫に大きな影響をもたらしただろう。実際、天明3年（1783）の大凶作や天保（1833・1836）の大飢饉が起こっており、これらは異常気象が原因だったことが知られている。さらに、江戸時代には死者1000人以上に及ぶマグニチュード8以上の大地震が6回も襲っている。

一方、江戸の街を取り巻くように発達している関東平野は日本で最大の沖積平野であるが、米や野菜の生産としては、先に述べたように気候の寒冷化や気候不順による不作続きで、江戸の100万人以上の人々を養うにはそれほど十分とはいえなかった。一方、江戸湾の周辺には漁村があり、市街地、農村、里山、森林地帯が江戸湾を取り巻くように存在した。そしてそれらを貫通するように、比較的大きな河川の隅田川、荒川などがあり、河川を通して、湾内の動植物プランクトンを育てる窒素やリンといった栄養塩が、森林地帯

や田畑から輸送された。そのため江戸湾は豊かな漁場であつたわけである。

いずれにしても平野部が少なく、資源も限られた日本にあつて、とりわけ江戸時代は厳しい自然環境であつたものと推測される。ゆえに有限な資源をいかに節約し、また資源の再生や循環を考えざるを得なかったことも江戸に循環システムが形成された要因のひとつであつたと考えられる。

3・3 江戸幕府による政策

江戸幕府は、循環システムの構築に対して様々な政策を打ち出している。⁽²³⁾なかでも大都市につきものの問題であるごみ処理については、種々の工夫が見られる。初期においては、屋敷内や空き地、川や堀への投棄、また江戸の町の区画には「会所地」と^{かいしよち}呼ばれる空き地へのごみ投棄が行われていたが、悪臭やカ、ハエなどで悩まされるといふ弊害があつた。そこで、慶安2年（1649）に「町触」を出し、「会所地」にごみを投棄することを禁止し、さらに、明暦元年（1655）

には深川永代浦をゴミ投棄場に指定した。寛文2年（1662）には、処理業者も指定し、一定の場所に集められたゴミを処理業者が処理する仕組みをつくった。こうして収集・運搬・処分というゴミ処理の3つの過程が、江戸の町の中で組織化されていた。また、指定場所以外にゴミが捨てられることを禁ずる法令も出され、元禄12年（1699）頃には、川への投棄等の禁止や、処理業者が適正に処分場まで運搬することを定めており、現代の不法投棄対策ともいえる仕組みがあったことになる。

3・4 江戸時代の思想・宗教

『江戸に学ぶエコ生活術』⁽²⁴⁾を著したアズビー・ブラウンや、日本の環境省が発行した『環境循環型社会白書』⁽²⁵⁾では、江戸時代の資源の循環を可能にした思想・精神的態度として、「もったいない」精神と「足るを知る」精神をあげている。

「もったいない (Mottainai)」精神は、ノーベル平和賞を受賞したケニアのワンガリ・マタイ氏が世界共

通の言葉にしたいとの思いから世界中に広めてきた言葉である。日本語の「もったいない」をそのまま使用したのは、消費削減（リデュース）、再利用（リユース）、再生利用（リサイクル）といった言葉はあるものの、自然や物に対する敬意・愛（リスペクト）などの意味を含んだ言葉は他の言語に見つからなかったためだったという。⁽²⁶⁾「もったいない」は、もともと仏教用語であつたことが知られている。「勿体」^{もったい}は「物の本来あるべき姿」をさすことから、「勿体無い」は「本来あるべき姿ではないこと」、つまり、真の価値が生かされていないことを表す言葉である。したがって、マタイ氏の言うように自然や物に対する敬意・愛（リスペクト）などの意味を含んだ表現というのは正しい使い方になる。

ゆえに、「もったいない」精神は、資源のもつ価値をすべて使い切ることであり、もし使い切ることができなければその資源に対して申し訳ないという意味をもっている。その結果、資源の消費をできるだけ抑えることを可能にしたと考えられる。実際、『環境循

環型社会白書⁽²⁷⁾には、江戸時代の武士がまさに「もったいない」精神で生活していた具体的な様子を文献によって紹介している。『経済随筆』では「衣服を購入するさいには家族で同じ柄の服を購入し、後々つぎはぎしながら使うと良い」、また「使えなくなった糸くずは灯心用に使え」といったことや、また、『清良記』では武士や治世者がし尿の有効活用を説いている。さらには城（彦根城）も、天守や櫓、城壁など、建設材料の一部を再生利用品でまかなったような例もある。

一方、「足るを知る」精神は、仏教にも、また道教にもある言葉である。仏教の『仏遺教経』には、「若し諸の苦悩を脱せんと欲せば、当に知足を観ずべし。知足の法は則ち是、富樂安穩の処なり。足ることを知る人、地上に臥すと雖も、猶お安樂とす。足ることを知らざる者は、天堂に処すと雖も、また意に称^{かな}わず。足ることを知らざる者は、富めりと雖も而も貧し。足ることを知る人、貧しと雖も而も富めり。足ることを知らざる者は、常に五欲の為に牽^ひかれて、足ることを

知る者の憐愍する所と為る。是を知足と名づく⁽²⁸⁾」とある。他の仏教者にあつては、日蓮（1222・1282）の『法華初心成仏抄』⁽²⁹⁾、道元（1200・1253）の『正法眼蔵 八大人覺』⁽³⁰⁾、源信（942・1017）の『往生要集』⁽³¹⁾にもほぼ同様の表現を見ることができる。一方、道教の『老子』⁽³²⁾第33章にも「足るを知る者は富み、強めて行う者は志有り」とある。しかしながら、「莊子の思想には、輪廻のような考え方もあり、すでにインド仏教に通ずるところもある。……老莊思想の根底にかなり、仏教的なものを含んでいる⁽³³⁾」との指摘もある。

この「足るを知る」精神は、「少欲知足⁽³⁴⁾」とあるように、「欲少なくして、足るを知る」、これは、特に物質に対する欲望を抑制して、かつ満足することを知ることであることから、まさに資源節約の生き方を意味する。

したがって、これら「もったいない」や「足るを知る」精神が、江戸時代の人々のなかで生きた指針としてあり、それが江戸の循環型社会の形成に大きな役割

をもってきたと考えられる。

4 結論

世界に目を転じてみると、日本のように森林が育ち、豊かな自然条件に恵まれている地域はそれほど多くはないことがわかる。熱帯気候に属する熱帯雨林気候帯には豊かな森林や多様な生物相があるが、一年中高湿多湿で危険な生物も多く、自然の美しさや親しみを感じるといっても、むしろ恐怖の対象でしかない。一方、亜寒帯気候は針葉樹林に富むが、この場合には寒冷なため人間を遠ざける。他の気候帯を見ても、草木が全くない砂漠気候、草原しかないサバナ気候やステップ気候、寒冷すぎて苔しかないツンドラ気候と、世界の大半はとても豊かな自然とはいえない。確かに日本は一方で、火山の噴火、地震、津波、台風といった自然の脅威も時に襲ってくる。ゆえに、自然の豊かさのなかに常に緊張もなければならぬ。こうした自然の条件の上に、人間の営みや思想・宗教があり、これらは切り離して考えることはできない。まさ

に自然と人間との相関、「地人相関」⁽³⁵⁾と捉えることができるだろう。

日本の森林が豊かに保たれてきたのは、これまで見てきたように、豊かな自然と、そこで培われた神道や日本で育った仏教があり、それらが複合的に作用して人間の行為としてなされてきた結果であると考えられる。また、江戸の循環システムも、自然災害の多い時代であり、また大都市の人間を養うには十分とはいえない資源と生産のもとで、「もったいない」や「足るを知る」精神というものは、少なからず仏教に由来すると考えられる。しかしながら、江戸時代の人々が行っていた循環システムに思想的にどの程度影響を与えたかを知ることとはかなり困難であると思われる。かつて江戸時代は儒教の時代とさえ言われた頃もあったが、現在では疑問視されている。むしろ「思想・宗教の統一は江戸時代には見られなかった。むしろさまざまな思想・宗教の百家争鳴の状態」であり、江戸時代の代表的な思想家、二宮尊徳（1787・1856）の報徳思想もまた、「神仏儒の融合折衷に立ちながら、

農民の労働に積極的に意味づけを与え、勤労意欲を高めた⁽³⁶⁾ものといわれている。その意味では、「もったいない」や「足るを知る」精神は仏教だけでなく、東洋の思想・宗教に共通な精神で、それらが自然条件の厳しいなかで複合的に江戸時代の人々の生活や政策に影響を与えてきたというほうが適切かもしれない。

注

- (1) コンラッド・タットマン『日本人はどのように森をつくってきたのか』熊崎実訳、築地書館、1998
- (2) 梅原猛『森の思想が人類を救う』小学館、1995
- (3) 前出、コンラッド・タットマン『日本人はどのように森をつくってきたのか』
- (4) 鬼頭宏『環境先進国江戸』PHP新書、2002
- (5) 前出、コンラッド・タットマン、1998
- (6) 前出、梅原猛『森の思想が人類を救う』
- (7) 中村元編著『仏教植物散策』東京選書、1986
- (8) 末木文美士『日本仏教史』新潮社、1992
- (9) 前出、梅原猛『森の思想が人類を救う』
- (10) 『梵網経』巻下、大正大蔵24巻、1006頁中
- (11) 鈴木秀夫『森林の思考・砂漠の思考』日本放送出版協会、1978
- (12) Saish Kumar. *You are Therefore I am: A Declaration of Dependence*, Green Books, 2002, p.89. そのほか、アショーカ王は、石柱法勅においても、「一人に効用があり、家畜に効用がある葉草は、それがないところでは至る処に輸入し、栽培せしめた。同様にして、樹根も果実も、それがないところでは至る処に輸入し栽培せしめた。道路には、人と家畜の受用のために、井泉を掘鑿せしめ、樹木を植えしめた」(塚本敬祥『アショーカ王碑文』第三文明社、1976、129・130頁)のように、植林を呼びかけている。
- (13) 環境省『平成20年版 環境循環型社会白書』2008、<http://www.env.go.jp/policy/hakusyo/h20/>
- (14) アズビー・ブラウン『江戸に学ぶエコ生活術』(幾島幸子訳) 阪急コミュニケーションズ、2011
- (15) 鬼頭宏『環境先進国江戸』PHP研究所、2002
- (16) 前出、環境省『平成20年版 環境循環型社会白書』
- (17) 前出、鬼頭宏『環境先進国江戸』、鬼頭は5Rとして、rental and leaseを取り上げているが、他ではRefuse(不要なものを買わない)を入れる場合もある。
- (18) 前出、環境省『平成20年版 環境循環型社会白書』
- (19) 前出、鬼頭宏『環境先進国江戸』
- (20) 同上、環境省『平成20年版 環境循環型社会白書』および、前出、アズビー・ブラウン『江戸に学ぶエコ生活術』
- (21) 同上、環境省『平成20年版 環境循環型社会白書』お

部分をそのまま述べている。
源信『往生要集』（岩波書店）

(31) 源信『往生要集』(岩波書店、2003)に「足ることとを知らば貧といえども富と名づくべし、財ありとも

欲多ければこれを貧と名づく」とある。

(32) 『老子』 岩波書店、2008

(33) 福島要一、S・D・B・ピッケン 『環境と思想』 三省

堂、1986、284頁

(34) 前出、注25、および法華經『普賢菩薩勸発品第二十八』

に、一是の人は心意質直にして、正憶念有り、福徳力

有らん。是の人は三毒の悩ます所と為らじ。亦た嫉

妬・我慢・邪慢・増上慢の悩ます所と為らじ。是の人

は少欲知足にして、能く普賢の行を修せん」〔妙法蓮華經疏〕

『華經並開結』創価学会、(675頁)とある。

(35) 牧口常三郎『人生地理学』 聖教新聞社、1971

(36) 末本文美士『日本宗教史』岩波書店、2006

(やまもと しゅういち)／東洋哲学研究所主任研究員

創価大学教授